

■インタビュー デュプロ精工株式会社 代表取締役 橋口 英樹 様

Q1. 会社の創業のきっかけやこれまでの歩みについて教えてください。

お客様に選ばれ、喜ばれる企業になるというのが当社の企業理念です。当然、お客様に喜ばれるというのはあるんですけども、選ばれるというところにちょっとポイントがあって、コンプライアンス、法律とか、そういうのもきちんと守っていかないと、皆様に選んでいただけないので、まずは選ばれるように自分たちの身を律するというか、そういうことをして、いい商品を作つて、お客様に喜んでもらいたいというのが企業理念を作った目的です。我々の目指す企業像ということなんんですけど、昔から仕事に役立つ機械というのをずっと作ってきてるので、その我々の作る機械で、社会貢献をしたいというのが私たちの目標です。

Q2. 主な事業内容と、これまで特に力を入れてきた製品や技術の特徴を教えていただけますか。

当社は今年で 52 年になるんですけども、ずっと作っている機械は孔版印刷機という印刷機ですね。コピー機に比べると印刷のスピードが速いのと、印刷コストが安く、同じものを印刷するのであれば、コピー機より安いので、学校などで導入をされています。これを 50 年間作り続けているんですけども 30 年ほど前に業界で初めて CCD とサーマルヘッドっていうのを使って製版する機械を作りました。今まで結構面倒くさいやり方をしていましたけど、コピーと一緒にボタン一つで印刷ができるという機械を業界初で作りました。

Q3. 他社との違いやデュプロ精工ならではの強みは何だとお考えでしょうか。

デュプログループの在り方というか、これがちょっとよそとは違っています。国内に 6 つの販売会社、海外に 7 つの販売会社で、製造とか開発をする拠点というのが国内に 3 つあります。本来であれば そこを統括する本部というか、本社があつたりとか、会長がいて、全部を統括したりとかするんですけど、デュプロっていうのは独立採算というんですけど、今言った 16 の会社に 16 の社長がいて、緩い関係で連携しているので、結構一つ一つの会社が自由に経営できるというところなんです。経営判断というのが非常にスピーディーにできるのと、新しいことにチャレンジして失敗してもあまり周りから文句を言われないというか そういうところなので、チャレンジのしやすい企業という形になっています。その辺がグループの特徴と言えば特徴ですね。

Q4. 創業当時から現在まで、会社や製品で最も大きく 变化した点をお聞かせください。

やはり 52 年会社をやっているんですけど、100 人ぐらいを超えた頃というのは、やっぱり会社として、大きな転機になったのかなという感じがします。それまでは比較的家族経営というか社長一人が会社隅々まで目を光らせるっていうか、やはりちゃんとした組織を作ろうという形で動き出したのが 100 人を超えたぐらいのタイミングなので、今から 35 年前とかそれぐらいの頃ですかね。

Q5. 新しい製品や技術を生み出す上で最も大切にしている価値観や考え方はなんでしょう。

事務機というのはやはり誰でも使える、簡単な操作という形で商品の開発をしてきていたんですけど、今は事務機だけじゃなくて、印刷業界であつたりとか、工場で使ってもらえるような機械も今開発をしているんですけど、やはりそこでもすぐに使えるという、機械づくりを目指しています。今、印刷業界で名刺を作る機械であるとか、ああいうのというのは元々ギロチンという断裁機、大きな刃物で、がさっと切るのが主流だったんですけど、やはりそれにはコツがいるし、刃物を使うので危険でなかなか入ってすぐに使えるものではないんですけど、ボタン一つで切っていくという、安全であつたりとか、スイッチを押しておけば、その間に違う仕事ができたりとか、そういうところが受けて、販売の方が広がっているという状況ですね。

Q6. 社員の多様なバックグラウンドや働きがいを大切にするため、職場づくりや人材育成で工夫されていることはありますか。

働きがいというのは、働きやすさと、やりがいというのがあると思うんですけど、働きやすさっていうところは、やはり環境という形で、冷暖房を入れたりとか建物をきれいにしたりとかっていうのもありますし社員旅行をやったりとか、忘年会やったりとか、バーベキュー大会やったりとか、コミュニケーションをとれるような状況にしたりとか、休みを取りやすくしたりとか、そういうところで働きやすさっていうのを目指してると、やりがいに関しては、当社でも、やっぱりいくつか分担というのはあるんですけど、一つの機構を任せられてやるんですが、商品のコンセプトって、全体的にこういう商品をやっていくよいうのも、技術者も機構を任されてる一担当者も、そういうところに入って自分の意見を言える、お客様はこういう使い方をしたいだろうとかというような形で、入ってすぐでもいろんな意見が言えるっていうところはやりがいにつながってるのではないかなと思います。

Q7. 新入社員の研修や教育体制、また失敗を肯定する社風についてお考えや具体的な取組を教えてください。

当社の新人研修というのは、少し前までは1年間かけて学んでもらうんですけど、今は極力短く、半年ぐらいで各部署を回って仕事を学んでもらおうというのと、BS制度といってブラザーシスター制度というのがあって、新入社員に、入社4、5年ぐらいの先輩が付いて仕事を教えてもらうというのはもちろん、メンタル的なところのサポートもできるように、あまり年離れた上司だと相談しにくいんで、年の近い人がそういうふうな形で、サポートしてくれるという制度にしています。

Q8. 最近スタートしたヘルスケア事業や医療福祉などの異業種への取り組みに注目した今後の展望を教えてください。

当社はもともと仕事に役立つというか、仕事の業務効率であるとか、生産性を上げる機会というのをずっと作ってきました 医療業界とかの人の話を聞くと、人の命とか安全というのを重視するのであれなんですけど、でもそういう業務効率とかっていうところの考え方というのが、あまり高くはないので、現場ではかなり大変な思いをしているというのを聞いて、それであれば当社がいろいろ今までやってきた簡単で使えるものというような形で提案すれば、みんなが介護関係とか医療関係に従事する人が楽になるのではないかなっていうのが着眼点ですね。

Q9. グローバル展開について、特に成長を期待される 市場や取り組みを教えてください また、マルチグラフ社の買収によるシナジーへの期待感もあればお願ひします。

成長を期待するという地域というのは決めているわけではないです。これから人口が増えるところには、可能性があるのかなというふうに思っていて、インドであるとか、東南アジアではインドネシア、ベトナム、この辺が人口ボーナスといって、まあそれより先であれば、アフリカとかっていうところが孔版印刷機に関しては、期待できる地域かなというのがあります。でも逆に、DCのカッタークリーサーとか、省人化、人の手があまり必要なくなる、とかっていうところは、日本も含んだ先進国というのは、人口がこれから減っていく、人手不足と言われているところは、そういうカッタークリーサーであるとか、医療機器の物であるとか、そういうのは、これから期待できるかなというので、やっぱり用途によっていろいろ期待する地域というのは、変わってくると思います。マルチグラフのシナジーということなんんですけど、マルチグラフも同じ印刷した後の後処理機、カッタークリーサーと同じような後処理機を作ってる会社なんんですけど、ここも歴史があって、ヨーロッパでは認知度が高い会社です。でも独自の販売網というのは、彼らは持っていないかったので、それをデュプロの販売網を使って、販売を増やしていくけるというのと、スイスって給与で言うと、3倍以上ぐらいの人工費が高い国なんですね。だから、そこで作ってたものを日本で生産すれば安くできるし、我々も工場の稼働率が上がるという形で、マルチグラフの会長さんと、1年ぐらいいろいろ話をして、一緒になった方がお互いのメリットがあるだろうという形でM&Aをさせてもらいました。

Q10. 品質、環境、情報セキュリティの認証維持や SDGS の取り組みを 経営戦略にどう関わっていますか。

当然、ISO も SDGS も国際的な規格という形でこういう規格というのを取っておかないと、企業の信用度というのはなくなります。やはり特に海外では、やはり ISO とかというのを取ってないと、なかなか信用されないというのがあるので、これはもう普通に維持をしていこうと思っているんですけど、また医療系っていうと、品質というのを、かなり高い要求がされるので、当初今 QMS 省令というのを取っているんですけれども、それは 3 ランクあって、一番下のものを取得してるんですけど、今後医療関係に力を入れていきたいので、クラス2であるとか クラス1とかという形で上の規格というのを、取っていかないとビジネスにはならないので、そういうのを目指していこうと思っています。SDGS の方はですね、やはりヨーロッパの方がかなり進んでいて、ヨーロッパでビジネスしていくには、この SDGS という取り組みを、やっていかないと、なかなかそのサプライチェーンの中に、入れてもらえなくなりつつあります。当社も今年からなんですが、EcoVadis（エコバディス）という、SDGS の取組を客観的に、評価してくれる機関があるんですね。そこに申請をして、まずはブロンズ、ゴールド、プラチナかな、そういうふうなランクになった一番下のランクというのを最低でもそこを取りたいなという形で、今年から活動を始めたところです。

Q11. 和歌山に生産拠点を置いている意義や地域との連携や貢献についてどう考え。

デュプログループの創始者というのが志磨 重昂(しま じゅうこう)といって、この紀の川市の出身の人なんですね。75 年前ぐらいに大阪に出て事務機の販売とかというのを進めていったという形で、やはり創業者の出身の土地ということで和歌山にこだわっていきたいなと私自身は思っていますし、私も当然なんですけど、社員の 9 割方は和歌山の出身の人なので、やっぱり和歌山が好きやし、発展してもらいたいなという希望もあって、できる限り和歌山で、頑張っていきたいなというふうには思っています。若い学生さんも和歌山で働きたいという、あれはあっても、給料の面であったりとか、仕事の内容をやっぱり都会に行かないとできない企画の仕事であったり、そういうことも和歌山ができるように、これからもどんどんうちの会社っていうのを、発展させていきたいなというふうに、思っています。

Q12. デジタル化、自動化、技術革新に関して、本社が持つ技術的優位性や今後力を入れたい分野、プロジェクトについて教えてください。

孔版印刷機というのは、いろんな技術のすり合わせで、できているんですね。まずは原稿を読むというところでは、光学、光の学なんですけど、インクとかっていうのは化学ですよね。当然機械工学という形で、いろいろな技術というのがあるので、そういうのを生かしながら、今後いろいろ商品を考えていこうとは思うんです。今は特に、光学画像処理というところの技術っていうのを、今ものを作ったらみんな検査を、出荷する前に各企業さんがやっているんですけど、やっぱりそういうのって、ベテランの人が、目視で検査することが多いんですけど、それに取って代わって、カメラで自動で AI なんかも入れながら、検査していくような商品というのを作り始めています。

Q13. 御社の福利厚生制度について特に力を入れている点や特徴的な制度があれば教えていただけますか。

休みは、他の会社に比べても多いんですけど、休みを取得しやすい体制というか、風土というのを目指しています。うちの会社の中では、仕事の多能工というんですけど、自分の仕事だけじゃなくて、周りの人の仕事っていうのを、ちょっとずつ覚えていくって、誰かが休んだ時にフォローができるっていうような、体制をしているので、有給の取得率というのは、どんどん上がっているし、育児休暇というのも、今まででは、女性だけが育児休業というのを、取っていたんですけど、2、3 年前ぐらいから、男性社員の育児休業を、長期で取得するようになってきたので、そういう風な取り組みっていうのが、どんどん浸透していっているのかなっていうのがあります。あとは保育所、企業内保育所などでただ単に社員の子供を、預かるというのではなくて、情操教育にも力を入れるので、遊具であったりとか、公園とかっていうのは、企業内保育では考えられないぐらい、充実しているのと、

また食育とかっていうのにもこだわって、保育所の中で調理師さんが調理して、昼食を作ってくれていて、まあただ安心して預けられるというのではなくて、子供の成長とかっていうのも考えているので、さらに預ける親御さんとかっていうと、子供の教育とかっていうのも考えないといけないんですけど、うちの保育園に預けていただいている間は、そういう心配なく仕事に集中してもらえるような状況というのを作っています。あとは社員がうちの会社のことを、自分の会社やというふうに、思ってもらいたいという思いから、従業員持株会というのを作っています。やっぱり会社の業績とかっていうのも、社員が分かるようになっているし、業績が良ければ、株式の配当というのが社員に、回ってくるような形になっています。

Q14. 会社を経営する上で一番大変だったことや印象に残っている出来事、それを乗り越えるための工夫は何です。

一番この会社が危機的な状況になったというのが、今から30年前くらいですかね。特許を侵害したという形で、他社から訴えられたことがあります。その時はですね、訴えてきた企業というのが、大手の上場企業だったので、そとの紛争というのは、大変なものがあったんですけど、それ以上に、特許を侵害するという形で、その時の製品を生産できなくなってしまうと、もう会社を置かないといけないというような状況になってくるので、その時のトップは非常に苦労していましたし、私もそれで色々サポートしていたんですけど、やはりちょっとこう危機的な状況が、その当時にあつたというのがあります。それから特許に関しては、もうかなり真剣に取り組んで、色々特許の重要性というのを、その時に思い知ったので、うちの社員の中に、弁理士さんがいるんですけれども、これぐらいの規模で弁理士さんを、社員として雇っている会社というのではないと思います。今はその弁理士さんを中心に、知的財産グループというのが、あるんですけど、そこが商品を開発する時に、他社の特許を調べて、侵害していないかというのを調べたりとかね。我々の製品に特許というのをやって、優位性を作るために、特許申請をしています。その結果、特許の数っていうのが和歌山で一番になります。

Q15. 今後10年、デュプロ精工として実現したい理想の姿や会社の目標、また新しいことに挑戦し続ける原動力は何ですか。

やはり我々の会社というのは、こう仕事に役に立つ機械というのを、今まで作り続けてきましたし、これからも、それは作り続けていくと思っています。世の中の仕事に役に立つということは、やっぱりそれは世の中への社会貢献だとは思いますし、デュプロっていうのは、無くてはならない会社という風に思われたい。そういう風に思ってもらえば、うちで働く社員も自信を持ってデュプロ精工で働いていて良かったという風に思ってくれると思うので、良い循環になってくるとは思うので、これからも力を入れて世の中の仕事を楽にするっていう仕事を進めていきたいなと思います。

Q16. 学生や若い世代に期待されること、社会人になる前に経験しておくということ、ご自身からメッセージをお願い致します。

やっぱり学生時代とは違って、機転が利くとか気が利くとか、そういうことっていうのが結構会社へ入ると大事なんです。でも機転が利くとか気が利くというのは、何が一番大事かっていうと、やっぱり想像力なんですよ。想像力っていうのは、自分の経験していないこととか、そういうことを頭の中で思い描くそっちの想像力で、仕事を任せられるのが早くなるとか、期待が高くなってくるとは思うので、想像力っていうのを鍛えて欲しいなって思います。どういうふうにして鍛えるかというと、本を読んだりとか、価値観の違う人と接するとかを、和歌山だけじゃなくて、旅行に行っていろんなものを見てくるとか、そういうことをいろいろ経験して、想像力っていうのを、広げていってもらいたいなとは思うので、まずはいろんなことを経験してもらえたならなと思います。

橋口様 本日は色々教えていただきありがとうございました。こちらこそありがとうございました